

おいでん・さんそんSHOW

5月号

2018.05.01発行

イベント情報

2018年度ミライの職業訓練校 受講生募集

- コース：■本コース[15,000円/年7回] ■お試し参加[5,000円/回] ※本コース・お試し参加共に宿泊費、交通費、食費は別途実費 ■山里インターンシップコース [期間に応じて30,000~45,000円程度 ※実働時間は時間給900円の支給有り ※本コース代込] 「山里での暮らしかた、はたらきかた」をじっくりと体験したいという受講生向けに、旭地区内をフィールドにインターンシップコースを本年度より開設しました。世話人代表の戸田らと共に、本講座と連動しながら、より深く広く学ぶことができます。研修費(宿代と食費)はかかりますが、実施期間も相談でき、実動には時間給がでますので、費用面で無理なく体験することができます。ご興味のある方はぜひご連絡ください。 ※インターンシップには移動に普通免許と自家用車が必要です。 ※インターンシップ期間中の活動内容、写真などはパンフレットなどで使用する場合があります。 ※本コースとインターンシップコース受講中、途中で辞退される方は、いつでも返金いたします。
- フィールド：豊田市旭地区「つくラッセル」近隣+先進地(山里)+市街地拠点(Kabo。 ※1大ナゴヤ大学※2など) ※1豊田市市街地にある、地域 × 若者がゆるくつながる場、地域の魅力的なヒトモノコトを発信する場 ※2『街(ヒト+モノ+コト)』にフォーカスした授業やイベントを企画しナゴヤを面白がる人を増やすことを、ミッションとしている団体
- 定員：15名程度(書類審査を行います)
- 募集対象：今の働き方又は将来の働き方にモヤモヤを感じている方、田舎に興味がある、移住を検討している方、天職を探している方
- 応募方法：氏名、住所、電話番号、メールアドレス、志望動機(400字程度)をご記入の上、FAX.0565-62-0614 またはE-mail: miraino@sb-ken.comにご連絡ください。
- 申込締切：6月25日(月)
- 期間：2018年7月~2019年2月 ※会場詳細は後日連絡いたします。

【説明会】5月13日(日)ミライの職業訓練校×大ナゴヤ大学/雇われるでもなく起業でもない働き方! 【第1回】7月1日(日)開校式/モヤモヤとは? 高校校長の講話を聴き、自分史を通して、自身との対話の仕方を学びます 【第2回】8月4日(土)~5日(日)/山里に移住した先輩たちの暮らしを聞くことで、互いの学びからそれぞれのあり方を考えます 【第3回】9月9日(日)/それぞれのモヤモヤをお互いにシェアしながら深めていきつつ、具体的な一歩を模索していきます 【第4回】10月6日(土)~7日(日)/受講生と職員、スタッフで話し合いながら、先進事例の視察へ行きます 【第5回】12月2日(日)/それぞれの実践にむけて「仮説の転がり」を共有しながら、モヤモヤ力を醸成させていきます 【第6回】1月13日(日)/これまでのワーク、実践を通して得た学びを共有し、深めます 【第7回】3月17日(日)/卒業後の『くらしごと』を見据えて、約8ヶ月に及ぶ訓練成果を発表します。

- 主なスタッフ：■校長 高野雅夫/名古屋大学大学院環境学研究科教授。主として資源が枯渇した千年後も成り立つ地球と社会のための『千年持続学』を研究。具体的には、『千年持続学校』や本校の校長を務めるなど、地域住民、行政とともに豊田の中山間地の地域再生に取り組んでいる。
- 世話人代表 戸田 友介(株)M-easy 代表取締役。2009年の「日本再発進! 若者よ田舎を目指そうプロジェクト」をきっかけに旭地区に移住。新聞店、イベント企画やご近所さんの頼まれごとなどたくさんのお仕事で生計をたて、田舎への移住者の仕事づくりの支援も行っている。

その他の情報は、センターHPをチェック!

センター長のミライのフツツに 向かって!



センター長 鈴木辰吉

VOL.42 つくラッセル

平成24年3月に閉校した旭地区旧築羽小学校に6年ぶりに350名もの地域の人々が集った。この日、137年にわたって地域に暮らす人々の心の拠り所

であり続けた小学校が「つくラッセル」として蘇ったのである。「つづつ」「はたらく」「つくる」

2045年頃には、ロボットとAI(人工知能)が人の仕事に

とって代わる時代が訪れると言われる。働かなくても遊んで暮らせる社会が到来する訳だが、それは幸せな社会と言えるだろうか。人は働くから幸せになれるのだとすると、その時代の「はたらく」とはどのような形になるのだろうか。

「つくラッセル」は、その答えを導くためのチャレンジでもあると思う。地域の子どもからお年寄りまでが世代を超えて「つ

特集「松平地区、滝脇小学校区に新しい風が吹いている」



『子どもたちの学び場を守る』ために
移住者受入れに向かって
地域が変わる

前列:(左)つばさと根っこの会副会長 柴田典子(しばのりこ)さん(右)副会長 加藤久美子(かとうみこ)さん
後列:(左から)松平地域会議会長 加藤勝信(かとうかつのぶ)さん、林添自治区長 古川悦次(ふるかわえつじ)さん、長沢自治区長 加藤正樹(かとうまさき)さん、滝脇自治区長 佐野勝之(さのかつゆき)さん

おいでん・さんそんセンターは、山村地域の自治区の要望に

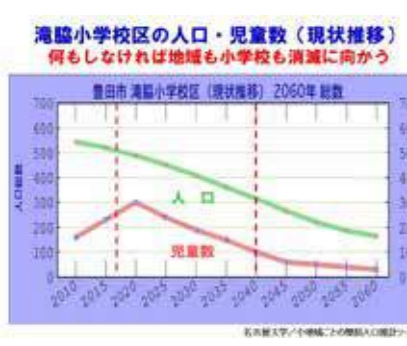
の児童数は、現状のままいくと2040年には10人を切る見込みとなります。しかし、一年で2世帯の子育て世代が移住してきた場合、2040年の児童数は40人と予想され地域が持続する可能性が高くなります。前述の出前講座ではグラフを使い、センター長の鈴木が説明させて

昨年度末から、今年度の始めにかけて、松平地区の3つの自治区から、連続して依頼がありました。11月に滝脇町自治区、1月に林添町自治区、2月に長沢町自治区で行った講座に参加した皆さんの表情は真剣そのものでした。この3つの自治区は、滝脇小学校区内にあります。

この推計を聞き、「まさに自分たちの問題だと感じた」と滝脇自治区長の佐野勝之さん(65)。「私の住む組の世帯は、20軒から10軒に半減しています」と実感

名古屋大学が監修している人口推移データによると、滝脇小学校区

佐野さん、加藤さん、林添自治区の古川悦次(68)さんに、滝脇小の印象を聞いてみると、皆さ



REPORT 

ほんわか里山交流まつり in 香恋の里しもやま

地元の結束力で、最終回となる第7回目を無事開催

3月25日(日)、下山地区にある、まどいの丘にて「ほんわか里山交流まつりin香恋の里しもやま」が開催されました。これまで足助地区、旭地区、下山地区で地元参加型のイベントとして開催され、第7回目となる今回でファイナルをむかえました。会場では、地元の方たちの打ったそばや、キャラクターの形の五平餅、小原や稲武や旭の食材を使った焼きそばやケーキなどのお店が並び、賑やかな地元の舞踊や本格的なフラメンコのステージも行われました。

また「住みにおいでん!いなか暮らし」と題して、和合自治区まつだとしあきの松田敏明さん、豊田市役所下山支所の酒井範正さんが、空き家・宅地候補

地・空き農地を案内してくださり、10名の方にご参加いただきました。ほんわか里山交流まつり実行委員長の新實一俊にいみかずとしさんからは「下山地区での開催は3回目となりますが、毎回地元の各団体による協力があったり成り立っています。今回は天候にも恵まれ開催時刻前よりたくさんの来場者で賑わいました。地元のおじいちゃん、おばあちゃん、子ども達の姿も多く見られました。田舎への定住を目標とした数々の企画を行ってくださった和合自治区の皆さんにも感謝しています。」とコメントがありました。

このイベントは、参加者の方に、下山地区の魅力を知ってもらうだけでなく、地元の皆さんの結束力を確かめる貴重な機会にもなったようです。(田中敦子)



キャラクター型の五平餅に、子ども達が味噌を塗っていた

REPORT 

旧築羽小を「つくラッセル」として再活用

「つどう・はたらく・つくる」拠点としてお披露目会を開催

平成24年の3月に137年の歴史に幕を下ろした旧築羽小学校が、『つくラッセル』として再活用されることになり、4月15日(日)にお披露目会が開催されました。準備を進めてきたのは、(株)M-easy、築羽自治区を中心とした『つくラッセル推進コンソーシアム』で、一般社団法人おいでん・さんそんも、そのメンバーの一員です。

お披露目会当日は、朝からのあいにくの雨にも関わらず、地元住民、スタッフ、報道関係者、そして築羽小学校の卒業生など350名が集まりました。体育館では、オープニングセレモニーや、ミニ講演会、旭地区を中心に活動する団体のステージ発表が行われ、注目を集めていました。教室をリノベーションしたシェアオフィス、コワーキングスペースの施設がすでに整い、手づくりのカフェや休憩室も出来上がっています。つくラッセルが掲げている「つどう、はたらく、つくる拠点」としての機能に期待が高まります。(木浦幸加)



350名もの参加があった

REPORT 

小学生が、農山村を舞台に多様な体験

セカンドスクール2018春フリー版を開催

セカンドスクール[2018春フリー版]として、5つの里山体験プログラムを3月26日(月)から31日(土)に開催しました。

旭地区の「山っ子くらぶ」は、旧築羽小学校を再活用した地域を担う人材創造拠点『つくラッセル』で行い、子どもたちは、「子ども会議」で自分たちで企画を練る体験をしました。「あさひ山里ぼうけん遊び隊」では、自分でおにぎりを作ったことがないという子に、リーダーの子が教えている微笑ましい様子が見られました。

足助地区の「土の子ネイチャーランド」は、香風溪の散歩やヤギとの散歩、ピザづくり、稲武地区の「山のこどもになる!3日間」では、町の歴史の謎解きゲームや、農産物の収穫や出荷のお手伝いをしていました。「おいしい体験しもやま」では、教え合いながら片付けをしている様子が印象的でした。

帰宅後、保護者の方から、「家の手伝いを行ったり、積極的に自分から話しかけたりするようになった。」との声も届いていて、子どもたちの成長につながったことが伺えます。(田中敦子)



足助地区での様子



「子どもたちが野鳥調査についての結果報告をしている姿を見ると、ひとりひとりが主役だということを実感します」とつばさと根つこの会・副会長の柴田典子たのりこさん。滝脇小は小規模特規模特認モデル校の視察、今年の9月30日(日)で第9回目となる「滝っ子まつり」というイベントの開催、年に6回の野鳥の森の整備活動の全てに自治区が関わっています。

柴田さんと同じく副会長を務める加藤久美子かとうくみこさん(42)は、「つばさと根つこの会ができたことで、小学校と保護者、3つの自治区の絆ができた」と話します。今年度の児童数は、37名。そのうち6名が特認校制度を使つて通っています。昨年12月には、特認で通う児童が空き家バンクを利用して家族で移住してきたという嬉しいニュースもありましたが、「今後、児童が減り続けることに不安がある。地域が移住対策に取り組んでいくことに期待したい」と柴田さんは言います。

愛鳥活動で子ども達が活躍
滝脇小は、明治6年開校。昭和41年から愛鳥活動に取り組んでいて、近年では毎年、「愛知県知事賞」を受賞。平成29年度には、全国野生生物保護実績発表大会で「文部科学大臣賞」を受賞するなど、高い評価を受けています。「子どもたちが野鳥調査についての結果報告をしている姿を見ると、ひとりひとりが主役だということを実感します」とつばさと根つこの会・副会長の柴田典子さん。滝脇小は小規模特規模特認モデル校の視察、今年の9月30日(日)で第9回目となる「滝っ子まつり」というイベントの開催、年に6回の野鳥の森の整備活動の全てに自治区が関わっています。

学校、保護者、地域をつなぐ つばさと根つこの会
特徴的なのは、つばさと根つこの会には、保護者と学校だけでなく、自治区も参加していることです。会の立ち上げ当初に行つた三重県いなべ市にある小規模特認モデル校の視察、今年の9月30日(日)で第9回目となる「滝っ子まつり」というイベントの開催、年に6回の野鳥の森の整備活動の全てに自治区が関わっています。

移住者受入れのため前進
滝脇町自治区は、5月27日(日)に、林添町・長沢町自治区では、6月9日(土)に、『中山間地域等の建築特例(豊田市開発審査会基準第18号)』の勉強会を開催することが決まっています。どうしたら移住希望者を受け入れるために、家が建てられるようになるのか。「知らなかったら説明もできない。勉強して対策を立てられるようになりたい」と加藤正樹さんは意気込んでいます。古川さんは、「今までの慣習について若い人たちとも意見を摺合せながら、地域も変わるところは変わっていきけるチャンス」と前向きな姿勢を見せていました。

東京から夫婦で松平に
移住した加藤奈美さん(33)
主人が無農野菜の栽培を学ぶため、研修先に選んだのが、野菜を定期的に取り寄せていた松平地区の松本自然農園でした。昨年の3月に、東京都から豊田市内に転居し、アパートで暮らしながら、松平地区での家探しを始めました。松平支所の方にも相談に乗ってもらい、3軒ほど空き家を紹介してもらった後、現在入居している家に決まりました。



7月に出産予定の奈美さん。松平で子育てできることを楽しみにしている。

4月からは畑を借りて本格的に農業を始めます。松平は、野菜を販売するのに名古屋方面へも行きやすく、また、私の実家(川崎)にもインターからすぐ帰ることができる利便性があると思います。自然豊かな環境で暮らせることを嬉しく思っています。

松平地域会議会長
加藤勝信さん(64)
松平は歴史を活かした観光地として、松平氏の歴史を継承し、後世につないでいくことを一番の目的としています。昨年12月に、おいでん・さんそんセンターの鈴木センター長の出前講座を聞き、現状のままでは、地域が消滅に向かつてしまうことへの焦りを感じました。地域会議で、移住・定住対策に取り組んでいきたいということ、前支所長に相談し、これまで取り組んできた3つの分科会のうち、1つを来年度「定住分科会」に切り替えるように、準備を進めていくことに決めました。

今後は、住民の方たちに松平地区として、移住・定住に取り組む始めたということ認識してもらい、空き家情報バンク制度への空き家登録を増やすことや、Uターン者を増やすためのアイデア出しを皆さんと取り組んでいきたいと考えています。



今、人口減少に歯止めをかければ何とかなるのではないかと加藤さん